

WEBQU 活用の時代 ～ “3K” から “Evidence-based” へ～

県立高校教諭、秋田県教育カウンセラー協会会員
柴田 洋幸

管理職、生徒指導部、教育相談担当から QU の実施の提案や計画がなされている高校はどのくらいの数があるのかわかりませんが、秋田県内で私が勤務した学校では毎年でないまでも hyper-QU が実施されていました。実施してその結果を見たことのある教員にはその有用性がよく理解されていると思います。私は今、ラーニング・アナリティクスに基づいたエビデンス・ベーストの対応がますます求められていくことを強く感じています。

現在、私が勤務している学校では、毎年2回 hyper-QU を実施しています。QU の結果が返送された後にはスクールカウンセラーの佐藤さゆ里先生に来校していただいて「QU 検討会」を実施しています。実施をするたびに、日常の観察からは見出すことのできない生徒の思いや考えに気づいたり、カウンセラーから教えられた小中学校での支援の履歴を知ることから理解が深まったりする経験を得られています。教師の 3K と揶揄される「経験」・「勘」・「気合」（もしくは「慣習」）では、把握できていない生徒の実態が多くあることを実感させられます。

昨年 2023 年 5 月 4 日に盛岡市で開催された「WEBQU を用いた学級経営研修会～チーム学校の実践が求められている中での WEBQU～」に参加しました。私はここ数年、校務分掌で情報部を担当しているため、ICT、DX の波に乗り遅れないようにもがいている毎日ですが、さまざまなものがデジタル化するなかで WEBQU の存在を知ることになり受講した次第です。久しぶりに早稲田大学教育・総合科学学術院教授の河村茂雄先生のお話を聞くことができました。東京都内の管理職向けの研修でも WEBQU が取り上げられ、教育力のある教員の組織集団づくりとそれを活用した生徒の集団育成と個別支援に活用されている事例が紹介されました。例としては小金井市が教育データのクロス分析による学級経営と学力向上を進めている取組があります。

この WEBQU は株式会社ドコモビジネスソリューションズの教育クラウドプラットフォーム「まなびポケット」で利用することができます。秋田県では本校が最初の採用のようですが、本校にとって今年度は初めてのチャレンジなので、私が担当している高校1年生に対して実施しました。契約・登録の手順がスムーズにいかず手間がかかりましたが、実際の WEBQU のアンケート実施からその結果の集計までには1日かからないため、日中に実施した結果を放課後には見ること

ができました。質問項目と数は hyper-QJ と全く同じで、生徒は貸与されている各自のクロムブックを使って回答しています。「学校生活意欲尺度」「学級満足度尺度」に加えて「ソーシャルスキル尺度」から診断結果を測定することが可能です。Web 上のデータなのでクラス全体の状況と個人の状態の把握の行き来が簡単にできます。即日、診断結果を見ることができる利点を、担任やチームの学年部がどのように生徒の支援に生かしていくか、その手順や方法はどのようなものにするか、誰がイニシアチブをとるのかについては、今後考えていかなければならない課題です。

このように、教師の経験や勘に基づいた支援ではなく、教育データを活用したエビデンス・ベーストの実践が、1 次的援助（すべての子どもに）、2 次的援助（一部の子どもに）、3 次的援助（特定の子どもに）を適切に組み合わせられた形で行われ、学校生活の中の生徒のウェル・ビーイングを生み出し、維持していけることに期待しています。

